

有名人が相次いで発症している「多発性骨髄腫」

抗体つくる血液細胞がん化、高齢化で増加

「多発性骨髄腫」という血液のがんがあります。ここ数年で漫才師の宮川花子さん、俳優の佐野史郎さん、経済評論家の岸博幸さんらが、この病気で加療中であることを公表しています。今年1月には政党「れいわ新選組」代表の山本太郎さんが「その一歩手前の状態」であることも公表しました。みなさん、50代から70代で、治療を受けながら活動を続けられています。

赤血球や白血球などの血液細胞は骨の中にある骨髄で日々、つくられています。血液がんは、その骨髄にある血液細胞のもとになる細胞（造血幹細胞）が、白血球などに分化する過程で、がん化した病気です。患者数は高齢化に伴い増加傾向です。

血液がんには、たくさんの種類があり、がん化した細胞がどんな血液細胞になるか（分化傾向）によって分類されます。また、急激な発症か、ゆっくりかによって、それぞれ急性、慢性という名前をつけます。

水泳選手の池江璃花子さんは、白血球の一種のリンパ球に分化する細胞ががん化し、急激に発症したため急性リンパ性白血病と診断されました。

血液がんでは、がん細胞が全身に広がっており、治療の主体は抗がん剤です。最近では遺伝子パネル検査で遺伝子変異を調べ、診断や治療を決めることができます。タイプや治療経過によって、自分の骨髄細胞や他人の骨髄を移植する骨髄移植を行うこともあります。

血液細胞の中には、新型コロナウイルスなどの感染症の予防で重要な働きをする抗体（免疫グロブリン）をつくる専門の細胞があります。リンパ球の一種で形質細胞と呼びます。この細胞が、がん化したのが多発性骨髄腫です。このがんでは血液や尿中の免疫グロブリン（M蛋白（たんぱく））が特徴的に増加します。

免疫グロブリンの増加に加え、貧血や骨病変、高カルシウム血症などの症候を伴った場合に多発性骨髄腫と診断します。全がんの約1%を占め10万人あたり5人ほどの発症です。発症数も死亡数も年々増加しています。

■治癒は難しく、抗がん剤投与が基本

多発性骨髄腫は治癒が難しい病気です。初期治療、維持療法ともに抗がん剤治療です。最近ではプロテアソーム阻害剤などの新規治療薬が開発されたことに加え、CAR-T 療法（患者の免疫細胞を取り出し、特別な遺伝子を組み込み、がん細胞を狙い撃ちする細胞に変化させ、患者に戻す免疫治療）や二重特異性抗体といった免疫治療が再発・難治症例に対し、開発され、予後は改善しています。

多発性骨髄腫と同様に血液に M 蛋白が増加しているものの、病気の症状や所見がない状態があります。その一部に「くすぶり型多発性骨髄腫」という病態があります。年ごとに一定の割合で多発性骨髄腫へ進行します。最近では、この病状に対しても抗体薬での治療ができ、さらなる予後改善が期待できます。

多発性骨髄腫の原因も遺伝子の変異です。きっかけは、遺伝子をのせている染色体の一部が、別の染色体の一部と入れ替わる「転座」という現象です。

加齢で転座を含め遺伝子変異が蓄積し、がんが発症しやすくなります。血液がんなど、まったく正常な人の血液をよく調べると時々、特定の遺伝子変異を持つ血球が見つかります。「クローン性造血」といいます。これがあると血液がんのリスクが上がるだけでなく、心筋梗塞や脳梗塞など心血管疾患のリスクも高まります。